

日本史・陰の人物誌

忍者と 盗賊

戸部新十郎

河出文庫

忍者と盗賊

日本史・陰の人物誌



著者 戸部新十郎

昭和六十一年十月二十五日 初版印刷
昭和六十一年十一月四日 初版発行

発行者 清水勝
発行所 河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三十二―二
☎〇三―四〇四―八六一一（編集）
〇三―四〇四―一二〇一（営業）
振替口座（東京）〇―一〇八〇二

デザイン 栗津潔

印刷・製本 凸版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

©1986 Printed in Japan

ISBN4-309-40170-8



kawade bunko

91177



日文701447150

庫

忍者と盗賊

日本史・陰の人物誌



忍者ノ巻

一 忍者の源流……………8

忍者像の虚と実 散楽から忍術への道 神変役ノ小角と泰澄 日本古来の不可思議術 兵法は「忍」が起源

二 伊賀者と甲賀者……………43

伊賀の里は共和体制 忍者社会の管理機構 忍法極意書の誕生 「伊賀ノ乱」に出没する百地丹波 服部半蔵のうらおもて 鈎ノ陣まがりにおける甲賀古士

三 太平の隠密……………87

お庭番の証言 伊賀組と甲賀組の区別 諸藩にもあった隠密 伝書と忍技・忍具の実相 猿飛佐助の実像

盗賊ノ巻

一	鬼の子孫たち……………	132
	「盗人」の哲学 酒顛童子の実像 袴垂保輔の背景 忍術 と「盗術」	
二	乱世の横行者……………	167
	スッパとラッパ 蜂須賀小六は大野盗 石川五右衛門の真 実 忍者盗賊・風魔小太郎	
三	江戸の白浪……………	198
	大江戸の詐欺師 巷説・雲霧仁左衛門 日本左衛門の素顔 実説鼠小僧次郎吉 盗賊のロマン	
	あとがき……………	238

忍者と盗賊

日本史・陰の人物誌

忍者ノ巻

一 忍者の源流

忍者像の虚と実

忍者はわれわれにとって、たいそうなじみ深いものになった。

時代物の活字（小説）、映像（映画・テレビ）、舞台（芝居）にしばしば登場しており、描くほうにも見るほうにも、すでにある忍者像ができ上がっていて、いわば約束ごとが成立しているといってもいい。じっさい、もっとも視聴率が高いと思われるNHKの一連の大河ドラマにも、ほとんどといっていいくらい、忍者ないし忍者的要素をもった人物が登場して、興趣を高めてくれた。

たとえば『黄金の日々』の石川五右衛門、『天と地と』の加藤（当）段蔵、『国盗り物語』の服部半蔵といった高名忍者たちのほか、創作上の忍者を含め、ずいぶん出没した。『風と雲と虹と』の流浪芸人団は、忍者の一原型としておもしろいし、『赤穂浪士』の蜘蛛ノ陣十郎もまた、忍者の変型と考えることができる。

そのうえ、かれらはそれぞれ劇中人物ではあるけれど、全体のストーリーを展開させる裏方として、極めて都合がいい。普通なら知るはずのない敵方の内情や、何十里も離れたかなたのできごとを、その優れた足や眼で探り、伝えてくれる。なにもくどくど説明する手間もいらず、忍者の走り出すうしろ姿や、床下なんぞに潜む姿をかいま見たただけで、なるほどと納得できるわけだ。かれらは、ストーリーの伝達者であり、演出者でもあるのだ。こうして、なじみ深くはなったけれど、それだけで、忍者の正体がわかったわけではない。

ひところまで、忍者はただ妖しく、不可解な存在だった。黒い忍び頭巾をかぶり、鎖帷子かたびらをのぞかせた筒袖を着、伊賀袴をはいたいわゆる忍び装束で出現し、九字を切り、印を結び、呪文をとこなえたりすると、たちまち煙とともに消え失せ、あるいはへびやガマなどに変化へんげした。

そうでなくても、常識では考えられない強靱な体力をもち、獣のような疾走力や跳躍力、鋭い眼、鼻、耳をそなえ、神出鬼没する不気味な相手だった。もつとも、煙とともに消えたり、へび、ガマに化けるイメージを抱いている人は、かなり古い。それらは主として、『伽羅先代萩』、『天竺徳兵衛韓』、『榎』、『自来也』などの芝居や、猿飛佐助、霧隠才蔵が活躍する立川文庫、それに初期映画（活動写真）の世界である。

変化へんげものの舞台では、早替わりとか、せり上げとか、ドンデン返しとか、宙吊りとか、

なかなか奇抜な工夫をこらしている。簡素、嚴肅な能でさえ、たとえば「土蜘蛛」には、巢（クモの糸）が投げられる。これは細い鉛の棒を芯にして、薄紙を幾重にも巻き、ソバでも切るようにして切り刻み、掌に入れておく。それを際限もないほどに繰り出すのがコツで、先端の鉛がオモリの役目になり、きれいな拋物線を描いて、しだれるように拡がっていく。

活動写真はそんな派手な場面にならったので、やたらと忍者が登場していた。活動写真といえば、忍者ものと相場がきまっていたくらいである。

それについて、こんな伝説的挿話がある。

初期映画の撮影は、カットというごく初歩的な手法も知らなかった。ただ据えつけたカメラを廻しているだけだったから、いわば芝居を撮っているようなもので、忍者ものとなると、芝居そっくりな装置の工夫をした。ある日、仕上がったフィルムを映してみると、突然、主人公である忍者が画面から消えた。そしてつぎの画面でひょいと現れた。それはその間、たぶん小用にでも立ったのだろうが、カメラは気づかずには廻っていたのである。

こんな偶然が撮影トリックを大いに進歩させた。その試写に立会った人は、忍者がまのあたりに消滅して、さぞ驚いたことだろう。こういうわけで、忍者ものがいよいよはやることになった。

いまではしかし、そんな妖しい楽しさはない。煙は火薬にすぎず、化身したかのよう
にへびやガマを小道具に使ったのだらうと、ごく素気なく解釈されるからである。また
異常な体力や、飛んだり走ったりする術は、それらが人体の際限まで鍛錬し尽した結果
だと説明されている。

知られた話だけれど、『忍術秘録』によって抽出してみる。

「まず、桶に水をいっぱい満たし、その中へ首を突っ込ませて、十分ばかりも我慢さ
せる。つぎに、唐紙の上へ水を撒き、その上を渡らせる。紙を破らずに渡るだけの敏
捷さを見るものである。この試験に合格した者が、第一に行うものが整息法である。
鼻の先に軽い綿クズをつけて呼吸させ、少しも動かしてはならない」

「力紙といって、紙を八ツに折り、奥歯に噛み、自分の足元を見ながら、小刻みに歩
く。顔を上に向けると、鼻腔へ風の抵抗ができて、それだけ苦勞するから、ややうつ
むきかげんがよろしい。それで一時間に四里（約十五・七キロ）一日に四十里（約一五七
キロ）を歩く。」

その速力は、胸に菅笠を当てて、それが滑り落ちないでいどの速さがなくてはいけ
ない。または、一反の布を襟につけて、その先が走っている間、少しも地につかない
練習をやるのである」

「幅跳では三間（五・四メートル）高跳びでは九尺（二・七メートル）である。その練習をするには、まず一坪の地に麻の実をまく。麻は真直ぐに成長力の早いものであるから、その上を毎日跳び越える練習をする。一日ごとに高くなっていく。これを三年ぐらいのあいだ、繰り返し繰り返し、かなたこなたと跳ぶ稽古をするのである」

忍者の家人が、毎晩新しい草鞋を主人の枕元に置くと、翌朝それが全部すりきれていたそう。夜中に起きて走り廻り、それだけ荒い練習に励んだということなのだろう。そのほか、関節を外したり、毒殺を防ぐため、悪虫や土砂まで食べたり、平生はたしなまないが、いざというときのため、煙草をたてつづけに吸ったり、大酒を飲む練習をしたりして、体の内部まで鍛えるのだという。

いわれてみると、いくぶん大げさながら、なるほどと思う。けれども、それだけの話であって、少しも忍者の妖しき、不気味さを解決したことにならない。勝手なようだが、われわれは忍者の実態を知りたいと思うと同時に、常人が鍛えて到達できる程度ではつまらないという思いがある。

たとえば、百メートル疾走の限界は、ほぼ十秒そこそこだということを承知している。それにもかかわらず、忍者はもしかしたら、二、三秒足らずで走るのではあるまいか、とひそかに期待するわけだ。

私は以前、正統忍者の何代目とかいう達人の実演を見学したことがある。その達人はかなりの年輩で、年輩の割にはよく飛んだり、跳ねたりはしたけれど、梁を伝うだんになって、どうしたとか、どたりと落下した。見学者のあいだから、少し失笑が湧いた。達人も苦笑して、

「少し体調をくずしているの」といった。

多少でも、異常な忍者像を期待していた私たちはがっかりした。体調をくずしていようがいまいが、とても、ネズミやマシラのようにはいかないだろうし、人間ならもともとそのはずなのである。

どうも、忍者に対し、人智人力を超えた存在であってほしい、という気持ちはどこかにあるようだ。一種のロマンといってもいい。忍者像はだから、素気ない実態と、ロマンのあいだを往来して、辿らねばならないだろう。

散楽から忍術への道

ところで、これまで忍者のことを「忍者」という一つの言葉であらわしてきたが、この呼称はじつは新しい。古い文献に用例がないわけではないが、どちらかといえば、近ごろの忍術小説に使われて広まったものだ。以前は忍び、ないし忍びの者であり、俗に

“忍術遣い”といっていた。

ほか、時代により、またところによつてずいぶんたくさんよび名がある。細作、遊偵、さいさく 姦細、遊士、行人といった中国ふうなものから、スツパ、ラツパ、トツパ、軒猿、のきざる 三ツ者、饗談、草、かまり、伊賀者、甲賀者、隠密などである。新しいところで、探偵、スパイも入るだろう。

また名ばかりでなく、その発生、内容、意味合いも違っている場合がある。これらをひつくるめて、忍者とよんでいるわけだ。いずれ、本稿を進めるにつれ、それぞれに触れていかなばならないが、いっぽう、かれらの働きについて、三つの時期に区分できる。

(一) 戦国期以前

怪奇、面妖、不思議を主とする術の発生、横行する時期で、忍者前史といっていゐるかのドロンドロンと消滅するといったものの系譜である。

(二) 戦国期

敵陣、敵城に潜入して、探索したり、放火、殺戮を行ったりした時期。忍者がもっとも忍者らしく活躍したし、組織、技術が拡まった。

(三) 江戸時代

もっぱら治安、行政のための情報蒐集を行った時期。諸藩の動向や庶民の動き（主に

百姓一揆に眼を光らせていた。隠密、お庭番という呼称で活躍した。

かつて『風と雲と虹と』に登場した流浪芸人団は、(一)の時期である。当時、
 〈クグツ〉

とよばれた一団だろうし、芸は、

〈散楽^{さんかく}〉

だろう。

原作者の故海音寺潮五郎氏は、たいそうおもしろいことをいっている。

「ぼくは忍術と音曲とは、極めて密接な関係があると思っています。渡来した連中が、音楽とともに、忍びの術をもってきたのではないかと思うのです。忍術といつても、その頃のものは、観客相手の奇術だったでしょう。それなら、音楽とともにもってきても、不思議はないでしょう。忍術と音楽、この二つの技術がもっとも密接な関係があることの顕著なあらわれは、クグツです」(『史談うらからおもてから』)

クグツは、後年、単に人形廻しという意味に使われるようになったが、いろいろな芸を見せ、女は色を売るといいう一団そのものをさしていた。